

巻頭言

「『菜の花が世界を救う！』に夢をたくして」

菜の花プロジェクト&バイオマス事業のこれまでとこれから ～F・E・C自給圏の確立と地域資源循環システムの構築をめざして～

ろうきょう菜の花プロジェクト全国ネットワーク 事務局長
労協連合会 食農環境・産消連帯推進部 副部長 富田 孝好

はじめに ～激動する情勢と社会状況の変化～

ギリシャをはじめとするヨーロッパの債務危機はますます拡大して、金融危機も深刻化しています。この秋でも、10月14～15日に20カ国・地域(G20)財務相・中央銀行総裁会議や11月12～13日のAPEC(アジア太平洋経済協力会議)の開催などめまぐるしく展開している動きは注視せざるをえません。10月の20カ国会議では、「ヨーロッパを中心に世界経済危機激化の恐れあり」と強い懸念が表明されました。

このようなことから、アメリカや日本など資本主義諸国に債務・金融危機が広がるとともに、社会不安が生まれ、世界的に抗議・デモが拡大しています。また、これらの危機を利用して投機取引・為替相場変動・金価格高騰・株価乱高下などが現れ、これから世界はどうなってしまうのだろうかという不安が人々のところを「動揺」へと大きくかきたてています。

こうした内外の情勢から、日本、ましてやワーカーズコープに引きつけて見たときに、今の社会状況から第一に3・11東日本大震災後の社会

の変化、第二に大恐慌への不安、第三に協同労働の協同組合法の制定の必要性と重要性、以上の三点が課題として浮上してきます。

一方、リーマンショックや世界的な経済危機の広がりなかで、協同組合のシステムを、競争原理が支配する資本主義に代わる経済システムとして評価し、それへの転換を期待する声が高まってきています。「競争」ではなく「協同」による経済システムが究極的には、社会をよりよい社会へと発展させていくのではないかという認識が広がりをみせています。

また、さらには、今、私たち人類を取り巻いている危機は、単なる経済危機だけではなく、地球環境の危機や地域社会の崩壊、人間社会のつながりの危機などあらゆる分野でひずみや矛盾が拡大しています。私たちは、この間の実践のなかで協同組合そしてとりわけ労協・ワーカーズコープがこれらの問題の解決の一助となるのではないかという確信を手にしてきました。そして、新たに「環境」をテーマとする事業・活動への挑戦の第一歩を踏み出しています。試行錯誤・悪戦苦闘の連続ではありますが、人と社会が必要とすることであり、そ

こに仕事おこしの可能性があるのであればとの思いから、挑戦の第一歩がはじまっています。

菜の花プロジェクト・BDF (バイオディーゼル燃料)事業への挑戦

私たちは、2007年秋から菜の花プロジェクトに取り組みはじめました。この取り組みの原点は滋賀県・琵琶湖で「せっけん運動」からそもそもはスタートしてきました。労協では、労協クラブ／日本フロンティア・ネットワーク(労協の理念・目的に賛同する企業・団体等のネットワーク組織で東京・埼玉・神奈川・宮城で活動し、東京は一般社団法人化をしている)の食・農・環境プロジェクトで議論され、その後労協全体として菜の花プロジェクトへと発展し、実践に移されてきました。

菜の花プロジェクトは、農業との関わりが広く・深く・しかも多様に広がります。遊休(農)地に菜の花を植え、収穫した菜種は搾油して菜種油にする、菜種油は食用として、搾油時の油かすは肥料や飼料に、そして廃食用油は回収してBDF(バイオディーゼル燃料)等によりサイクルします。養蜂も取り入れ、資源循環サイクルとして進められる取り組みです。

日本の原風景であるあの黄色い菜の花畑を日本各地に広げ、地域や人びとの生活と結び、化石燃料に頼らない、しかも温室効果の高い二酸化炭素の排出を抑え地球温暖化を防ぐこの菜の花プロジェクトをベースにした労協・ワーカーズコープの食・農・環境での取り組みは、そのフィールドやネットワークにますます広がりを見せていきます。

これまでの歩みと到達点、 そしてこれから

(1)埼玉県 深谷市からはじまった菜の花プロジェクト

労協での菜の花プロジェクトは2007年秋、深谷市内の農地を借りたところからはじまりました。3反(約3,000m²)の広さで期待と興奮に胸おどらせながら種まき作業を行いました。それが、北本市・蓮田市へと拡大していきました。そして、それがさらに千葉県成田へと飛び火し、急展開を遂げつつ新たな場面展開へと発展していきます。

そして、2008年から2009年にかけての議論から、千葉県成田の取り組みと宮城県大崎での取り組みを2つのモデル事業と位置付け推進することとなりました。2011年3月10日には、ろうきょう菜の花プロジェクト全国ネットワークを結成し、さらなる発展をめざし全国的に菜の花プロジェクトを推進するところまできています。また、今年度、「F・E・C自給圏の確立を推進する」という方針も決定し、労協では食・農・環境分野に力をそそいでいます。

(2)千葉県 成田・芝山でのあぐりーん事業の実践開始

千葉県芝山町には労協若者自立塾(その後、2011年度で「事業仕分け」により事業終了となる)があり、若者たちの新たな仕事おこしの挑戦として菜の花プロジェクトが取り組まれることになりました。これには、地元芝山町の支援が力を発揮しました。成田国際空港株式会社(NAA)へのアプローチも芝山町の支援を受

けて実現しました。成田国際空港株式会社との協議では、空港周辺の広大な遊休地の活用とそのためには菜の花プロジェクトが有効ではないかなどが話題となり「提案書」をとりまとめ提出しました。その後、成田国際空港株式会社の後押しを受け、成田国際空港内レストランや周辺のホテル・機内食メーカーなどを一軒一軒訪問、労協とは何かからはじまり、地球環境を守ることと若者の就労支援につなげるという事業目的の説明、今回の事業の成功の一つの要素となる廃食用油の回収のお願いとアンケート(廃食用油の量・種類・現状の処分方法等)などを何度となく行いました。そうした準備作業を進めつつ、廃食用油をBDF(バイオディーゼル燃料)に精製し車輛や農業機械等に利用していくことにつながるプラント建設に向けた作業にも着手しました。そして、もう一方の柱となる遊休(農)地に菜の花を植え、菜種を収穫するという農業への挑戦も開始しました。

このような中、成田・芝山のこの事業は2009年度から農林水産省の助成事業ともなり、耕作放棄地・遊休地を復元させつつ、BDF(バイオディーゼル燃料)の利活用を推進して地域資源循環システムの構築をめざす事業へと発展してきました。私たちは、若者たちの就労創出と菜の花プロジェクトを結ぶこの事業を「あぐりーん事業」(Agriculture&Greenの造語)と呼んでいます。2009年秋には、成田・芝山バイオマス事業地域協議会(2011年度から名称を変更、「千葉県北総地区バイオマス事業地域協議会」となる)も発足して、毎回、夢と希望をつなぐ話し合いを進めています。

そして、2010年7月には芝山町岩山にてBDFプラント移設工事の「地鎮祭」を行い、年末には竣工、2011年年頭から試験運転を行い、稼働体制の準備を進めました。その後、東日本大震災発生などがあり、復旧支援等などにより通常体制への移行が遅れるなどがありました。5月より成田エクセルホテル東急などで送迎バスへのBDFの供給が開始となりました。また、農業機械でのBDFの利用も順次拡大してきています。

菜の花プロジェクトは、耕作面積がこの秋の播種で3町歩(約30,000m²)へと拡大しました。この夏の収穫は2.8トンの菜種が取れました。現在、搾油を行い、商品名「大地のこころ」(千葉県産)として販売準備中です。また、昨年は大本山成田山新勝寺に開基以来1073年灯明として使用されている菜種油を寄進し、感謝状をいただきました。そして、今秋千葉県香取郡神崎町の利根川流域に菜の花プロジェクトを展開することになり、1町歩にわたる土地を開墾し、菜種を播種しました。来春には、利根川流域に黄色い絨毯が登場することになるでしょう。

(2)宮城県 大崎市バイオマスタウン構想と結び、みやぎ生協・JAと連携して

2002年12月、バイオマス・ニッポン総合戦略が閣議決定され、地球温暖化の防止・循環型社会の形成・戦略的産業の育成・農産漁村の活性化が推進されることとなりました。さらには、2006年3月に新たなバイオマス・ニッポン総合戦略も閣議決定され、国産バイオマス輸送用燃料の利用促進や全国300か所の市町

村でのバイオマスタウン構想をめざすことなどを政府は重点施策として進めてきました。

このような中、大崎市は2009年3月に市のバイオマスタウン構想をまとめ公表しました。大崎市市内には、すでに介護・福祉サービスを提供する「なるっこ」や宮城厚生協会・古川民主病院の清掃、さらには2007年より大崎市内で若者サポートステーションの運営を行うなど、大崎市人口10万人のまちに事業所を4ヶ所設置しその活動を展開しています。そして、今回3年間の準備期間を要しましたが、農林水産省バイオマス利活用交付金を受け、みやぎ生活協同組合やJAみどりのとも連携しながら、大崎市内に東北地方でも有数の規模をほこるBDFプラント(日量1,000ℓ精製能力)を設置し、店舗等から出る廃食油をBDFに精製し、これをみやぎ生協の車輛等に使用するなどを計画の柱とする事業を開始しました。さらには農業分野での利活用もめざすことももう一つの柱としています。また、遊休農地を活用した菜の花プロジェクトも2008年秋から開始しています。この7月20日には「落成式」を行い、伊藤康志大崎市長を立会人としてみやぎ生活協同組合・JAみどりの・ワーカーズコープの協同組合3者による「基本合意書」の調印式も行われました。

菜の花プロジェクトは、遊休(農)地を活用しながら、かつての菜の花畑をよみがえらせ、地産地消のリサイクルをBDFも持ち込みながら展開するというものです。大崎でも菜の花プロジェクトが進められています。そして、成田や宮城県大崎のこの取り組みが私たちに示しは

じているのは、国・県・市町村との「協働」とJA(農業協同組合)や生活協同組合との「協同」、そして市民・地域の「連帯・参加」という社会連帯を生み出す可能性を内包しているということです。「それは持続可能な『生き続ける社会』をつくりだす」という崇高な価値に接近するという普遍性のある取り組みへの共鳴でしょう。

「『菜の花が世界を救う!』を合言葉に」…夢をたくして

今、私たちが覆う地球的な規模の危機の源は、利潤追求一本やりの独占的な資本主義経済システムにあることはまちがいないでしょう。ですから、経済システムが協同組合的に変革されていくなれば、地球環境の問題をはじめ民族間の対立など「戦争と平和」の課題などで人類が抱える重要問題の解決の糸口をたぐりよせることができることとなるでしょう。

「菜の花が世界を救う!」は、菜の花プロジェクトに込める思いを伝える言葉していきたいと思えます。この言葉には夢があります。この取り組みには、地域社会との「協同」と「連帯」そして、これをつなぐ「信頼」が必要となります。日々の営みと生活のなかから新しい事業への挑戦が今はじまっています。食・農・環境での社会連帯・社会的経済システムの構築をかけての挑戦です。…われわれは、今、壮大な夢とロマンをかけて挑戦する!

…このプロジェクトの実践を!!